

平成 30 年 3 月 29 日 00371 号

編集者:佐藤 寿春

北見市幸町 8 丁目 4-4(佐藤整骨院内)

NPO 法人北見市武道振興協会事務局発行

直通:090-5986-0839

代表:0157-22-2212 Fax:0157-23-0581

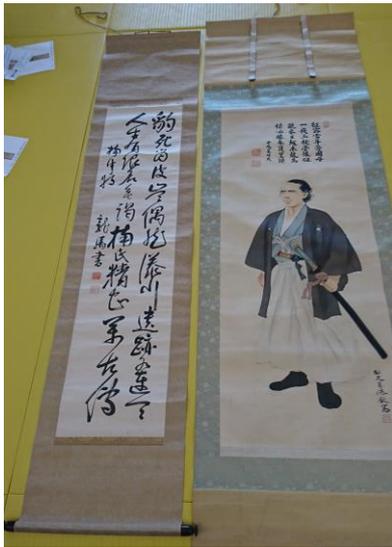
satou.tosiharu@navy.plala.or.jp

北見武道通信

URL <http://www.kitamibudokan.org/>

ニュースレター【事務局情報】北見市武道館感染予防月間(11月1日~4月30日)！ウイルス感染予防のお知らせとご協力⑰ 練習前の体調チェックは必ず行いましょう！

高橋亮氏が「坂本龍馬書の掛け軸」を NPO 法人北見市武道振興協会に寄贈しました！



3月20日9時30分仙台大学の高橋亮氏が北見市武道館に訪れ、予てから準備をしていた「坂本龍馬書の掛け軸」を NPO 法人北見市武道振興協会に寄贈していただきました。徳川斉昭の漢詩「大楠公」が書かれており、内容は、以下の通りです。



左から3番目高橋教

『 豹死留皮 豈偶然 湊川遺跡 水連天 人生有限 名無盡 楠氏精忠 萬古伝 』

読み方:「豹は死して皮をとどむ 豈(あに)偶然ならんや 湊川遺跡(みなとがわいせき)水天につらなる 人生かぎりあり 名はつくるなし 楠氏せいちゅう萬古につとう」大楠公(徳川斉昭) 訳:「豹は死して皮を留め、人は死して名を留めるといふ諺があるが、人が名声を後世に残すには決して偶然ではなく、必ずそうなるべき原因がある。南朝の忠臣大楠公が戦死を遂げた湊川の遺跡に来てみれば、川の流れが天に連なって今も昔も変わることがない。人の人生には限り

があるが、立派な人物の名声は永久に尽きることがない。大楠公のように純粋な忠義の精神は、いつまでも伝わって、忘れ去ることがないのである。」 ※大楠公とは:楠正成の敬称

高橋亮氏は、仙台大学体育学部健康福祉学科教授で同大学柔道部部長をされています。2020年には北見市武道館において「誰もが参加できる武道稽古演武会」を開催する予定とのことです。

連載「武道宝鑑」第18弾 柔道秘訣 柔道教士七段 尾形源治 『柔道修行の心得』

こんな場合、始めは投げられて上手に転ぶことを練習するのであると思えば、却って自在に投げられ、苦しめられたほうがよいのである。「憂きことのなほ此上につもれかし 限りある身の力ためさん」の歌の示すように、大勇猛心を起こして最初の苦しみを乗り越さなければならない。最初の苦しみを乗り越すと、今度は体格も見違える様に立派になって、業も自然思う通りに出来、止めよといわれても止められぬほど面白くなってくるのである。少々気分がすぐれない時等は、稽古すると治るという位になってくるのである。しかしまた一年も経過すると行つまって業がかからない、業が進まない、進歩が止まる。即ち高原状態に達する。ここが一番大事な処であって、皆誰も体験する処である。決して悲観してはならぬ。技の進歩は波形に進むもので一進一退伸びてはち縮まり、縮っては伸びて行くのである。更にくら業業が進み上手になっても、自惚れてはならない。自惚れは修行の大毒である。技術の神髄は深くして、これで充分であるということはない。今日の試合で彼に勝っても、明日の試合はどうなるかわからない。しかし自惚れと自信を混同してはならない。己を信ずる力は偉大である。いかなる荒神でも何をか恐れんというが如きは己を信じる力の偉大なるものである。修行者は常にこの自信を持たなければならないし、そこ迄到達するように心がけねばならない。自惚れは修行の妨げになるが、酒色もまた修行の大敵である事勿論である。…つづく